

自分の思い込みで見えていた

迎 弘文(28歳)

ユニチカ

樹脂生産開発部

「全力投球で取り組んでいー！」
松本中央研究所長が、こう言っ
て送り出してくれました。入社
して一年半、仕事のやりかたを
模索していました。「松本所長
も若い時に参加したと聞いた。
きつと今後の自分に大きく影響
するような体験ができるはずだ」
と、期待が高まりました。
そぼ降る雨のなか伊豆高原駅
に到着すると、いきなりミーテ
ィングが始まり、『初期S-20』
の開始を告げられました。わけ
がわかりませんでした。とに

かく『こま図』を片手に走り、
なんとかゴールにたどり着きま
した。すると一万ドルの金券を
渡されたのです。「すごいな、
ここでは成果がすぐに金になる
んだ！」。
チームメンバー八人のうち六人
が金券を獲得。仕事部屋に『獲
得金券業績表』が貼り出され、
個々の名前の横に獲得した金券
を貼り出すようです。「さあ、俺
も貼るぞ」というときに、なん
と、獲得した一万ドルがないの
です。「どこに落としたのか？」。

「対象はゆるぎなく存在しま
す。しかし、対象が自分にとつ
てどうかではだめです。自分を
さておいて見なければ、対象は
見えてこないのです」
全体ミーティングで藤田キャ
ンパスリーダーのお話を聴くと、
職場の自分が蘇りました。以前
から「対象をよく見ろ」と言わ
れつづけながら、何のことかち
んぷんかんぷんだった自分が。
しかしこのときはまだ、頭の
なかに霧が立ち込めていました。
『自分ばなれ』の意味に気づい

たのは、組革研から戻ってから
のことです。
松本所長にこの話をすると、
「探しものは、自分の『概念』意
識に上がっていること」から離
れないと見えるものも見えない」
とおっしゃったのです。ハッと
目が開きました。「そうか。対象
は、自分の思い込みを捨てない
と、本当には見えないのだ！」。
樹脂開発技術課で私は、「エリ
ーテル」という接着剤用樹脂を
担当しています。職場には、実
験結果という過去の膨大なデー
タがありました。エリーテルを
学ぶときも、開発を進めるとき
も、私はそれらの資料をつぶさ
に読みこみ、それをもとに「き
つと、こうだろう」と、机上で
結論を出していました。エリー
テルそのものをまったく見てい
なかつたのです。
「知識や経験は絶対だ、という
思い込みを捨てよう」。実験を私
が現物で行なって、自分の目で
見て事実を確認することが大切
なのです。「この樹脂はどんな材
料に対して接着しやすいのか、
実験して見つけ出すぞ」と、取
り組むようになったのです。

ほこね そして 伊豆高原

第2巻21号 08年7月 / 組織革新研究会・会報

- 【若者特集】——平均年齢四十一才の
企業人が集う組革研において、二十
代の若者の参加が推進されています。
彼、彼女らがなにを感じ、どのよう
に目醒め、いかに動いたか。「ほこね
基金」で参加した若者たちの「みず
みずしい覚醒」を特集します。
- 自分の思い込みで見えていた
 - 人生で一番大きいもの
 - “事実”へと追い込まれて
 - あきらめない、逃げださない
 - 対象は現場実態とマニユアルだ！
 - 下からでも変えられる

組革研ホームページ <http://www.sokaku.co.jp>

自分をさておいて見る

ダッシュで道を引き返しました。
雨の中、傘もささずにゴールとス
タートの間を何往復もして探し
つづけました。「金券、落ちてい
ませんでしたか？」。すれ違う人
たちに声を掛け、自分の考えら
れる範囲はすべて探し尽くした
のですが、とうとうみつかりま
せんでした。がっかりしました。
とにかく昼食に行くことにし
て傘を広げたとたん、なんと、
ポロリと金券が地面に落ちまし
た。思いもよらぬところに、金
券はあつたのです。